

センター通信

編集部：北京日本学研究中心2階211室

責任編集：佐々木衛・王津

[今月号の概要：シンポジウム総括、旅行記]

「世界の中の日本文学」

Japanese Literature in the World Context

北京日本学研究中心主催の「世界の中の日本文学」国際シンポジウムが、十月十六日から十八日までの三日間北京外国語大学のアラビアセンターで開催された。

開幕式に日本側からは在中国日本国大使館宮本雄二公使、日本国際交流国際交流基金北京事務所小熊旭所長が、中国側からは北京外国語大学学長・北京日本学研究中心実施委員会主任陳乃芳教授、

同大学副学長何其華教授がそれぞれ出席した。なお、中国社会科学院、北京大学比較文学比較文化研究所、北京大学東方学系、同済大学日語系、杭州大学日本文化研究所、南京大学日語系、大連外国語学院などの学界先輩と若手研究者ら約五十名も参加した。

冒頭の挨拶で北京外国語大学学長陳乃芳教授は次のように述べた。

北京日本学研究センターは設立12年このかた、教育を中心に日本学教育と研究のハイレベルの人材と養成すると同時に、研究の面においても長足の進歩と豊かな成果を遂げ、それにすでに七回にわたる総合的あるいはテーマ別の日本学国際シンポジウムを成功裏に開催してきた。本年はテーマと文学に絞り、「世界の中の日本文学」国際学術シンポジウムを開くことになっている。本シンポジウムは中国における日本文学研究と教育の中で紋切り型の一国主義の文学研究方法と打破し、世界文学の視野から日本文学を見直すことに力を置き、日本文学研究の新たな課題と探求し、中国の日本文学研究界と世界の日本文学研究界との交流と協力を促すこととそのモットーとしている。今回のシンポジウムが円満に開催されることを祈念する。

宮本雄二在中国日本国大使館公使はあらまし以下のように述べた。

本年は日中国文正常化25周年を迎えている。この25年を回顧し、国文正常化は、本当に容易なことではない大きな出来事だったと思う。全世界が21世紀に邁進しようとする今日、日中関係はもう日中两国にとどまらず「世界の中の日中関係」という新しい時期に来ている。世界に貢献する日中関係と実現するには、政治・経済だけでなく、文化・文学の面での相互理解も至極重要である。その意味で、今回のシンポジウムは、日中に限らず、韓国、カナダからも著名な学者を招き、掘り下げて討論をしてもらい、率直な意見交換をしてもらうことは、非常に意味深いことだと思う。

開幕式の後、韓国初代の文化大臣であり、日韓の文化の相違に基づき日本文化論で日本でもたいへん注目を集めている梨花女子大学李御宇碩学教授は「韓国でみた日本文学——俳句を中心に」とテーマに基調講演を行った。日本国籍でない学者を招いて、日本学のシンポジウムで、主として中国人と相手に日本語で基調講演をしてもらうことは北京日本学研究センターの初めての試みであって、学界でも希なことであった。

李御宇教授は「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」という正岡子規の句を初めて接した時の驚きと不思議さからスタートし、詰める美字、

時・場・物のコード、シジヨ（時調）の鳥・俳句の鳥、西洋・韓国
の蝉と日本の蝉等の小テーマを通して記号論、心理学の角度から日
本文学の典型的な例——俳句を焦点に日本文学にアプローチし、リ
スナーの心を引きつけた。

続いて午後のセッションでは、現在カナダカル・ガリー大学で英
語を母語とした学生たちに日本文学を講義している楊曉捷準教授
（北京大学を卒業後、京都大学で博士号を取得）と、日本有名な文
学評論家である小森陽一東京大学助教授は李御宇碩学教授を囲んで、
「世界の中の日本文学」について熱の入った新談を三時間にかけて
展開した。

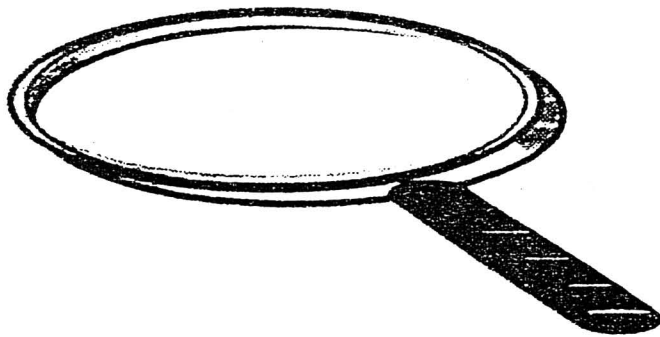
三人は、文学の分野においても相互理解が非常に重要であり、最
初は不快感をもったままにしてもお互いが分かり合うことの重要性
を強調し、それは偏狭な民族主義に陥らない唯一の道でもあるとい
う共識に達した。また文学研究で重要なことは違和感や反発とその
まま残すべきだという、対立を顕在化することの重要性も指摘され
た。それから外国人は日本文学を研究するときに自分を曲げて日本
人に成りきって読むべきなのか、或いは自国流のヒーロー探しなど
の方法で読むべきなのかという文学とアイデンティティの問題、漢

字と漢字圏の問題、日本人だから日本の文学が分かるはずだという前提はないこと、自国の文学とあたかも外国の文学として読むことを通して忘却しがらなところを回避することの必要性等々についても熱弁が振るわれ、聴衆から大きな拍手を博した。

翌日の十七日は古典と近・現代との二つのセッションに分けて、論文発表とパネルディスカッションが行われた。

二日間の大会と分科会で若手研究者を中心に多数の発表があった。今回のシンポジウムを通じて、中国において日本文学研究者の卵がすくすく育っていること、文学研究の面で共通の認識がどんどん多くなっていること、文学研究も次第に「国際化」を迎えていることをつくづく感じた。非日本国籍の学者を招いての基調講演も予想外の高評を収めた。こういう意味で今回の国際シンポジウムは大成功であったと言える。

(文責：王津)



旅行雑記

黄河で砂遊び

澤井敦・まゆみ

今回の山西省旅行のお話を最初にいただいたのは、北京にやってきましたようやく半月がたったかという頃でした。上の娘（真那、日本人学校一年）の転入や通学に関する雑事と、家族四人の生活環境を整えることで手一杯で、頭が観光にまで回っておらず、また、幼い子供連れ（下の娘、祐理は二歳）での「大人の団体」への参加ということもあり、はたして行ったものかどうか、しばらく決めかねていました。ただ、今は、この得難い体験を得る機会を逃していたら非常にもったいないことだった、と改めて感じています。

親子二人一組で過ごした「軟臥」や食堂車での夕食、同室の中国婦人との交流など、旅の始まりからすべてが興味深く、面白く思われました。数々の史跡をはじめ、山西省の農村や山村や炭坑街、明・清時代の面影を残す小都市や近代化の進む中規模都市などの様子、また、人々の生活をかいま見ることができたことは、親はもちろん、

子供たちにとっても貴重な経験になったことと思います。これも、同行のみなさまが、団体の中では少々異質な一組を、暖かく受け入れて下さったおかげと、深く感謝しています。

さて、壺口瀑布と平遥での、子供たちに関わる思い出深い出来事について、少々書いてみます。

壺口瀑布へ向かう山道をたどる少々スリリングな長距離ドライブの後、ようやくたどり着いたホテルでの話です。到着してすぐに夕食ということになったのですが、食事中に下の二歳の娘を母親がやや離れたトイレに連れて行き、いざ、と娘の両足を抱え上げたところでいきなり停電。善光寺のトンネル以来という真っ暗闇の中で呆然としてもいられず、片手で娘を抱き、片手を触覚のように広げて壁をまさぐりながら、娘に声をかけつつ、階段、廊下をそろそろと伝い歩きしていきました。その頃、食卓に残っていた父親は、同じく真っ暗闇の中で、トイレ内の母娘の様子を想像しつつ「ママたち大丈夫かな」と思わず声を漏らしたのですが、上の娘がその不安げな調子に反応し「ママがかわいそう」と大声で泣き出す始末。従業員のライターの火の導きにより、母娘は無事食卓に到着しましたが、後で部屋に入ると大きなロウソクとマッチが机の上に置いてあり、

妙に納得した次第です。

翌日の瀑布見学では、滝というよりは泥色の竜のようにうねる黄河の迫力に圧倒されました。上の娘は、記念にと黄河の黄色い砂をすくってフィルムケースに入れ、黄河の石（佐々木先生に鑑定？していただいた）とともに持ち帰りました。ひとしきり河岸で過ごし、帰りしな子供たちに、何があった？と聞くと、下の二歳の娘がうれしそうに「おすなば！」と言ったのには思わず笑ってしまいました。子供たちにとっては、まさに何千年の歴史のある広大な「砂場」で、砂をすくってはこぼして遊んだ、贅沢な一時であったと思います。

三日前に訪れた平遥も面白い街でした（この日の朝は、下の娘がホテルの部屋のポットを二つ、机の下に滑り落とし、中が粉粉に割れ床一面に散らばったガラスの破片に思わず思考停止という事件もありました）。平遥では、市街を囲む城壁の上をぐるりと三輪車で回り、その後、下の道路に降りて、またひとしきり市街を見物しようということになり、子供たちも喜んでおりました。ところが、三輪車は二人乗りしかなく、どうしたものかと躊躇しているうちに三輪車がすべて出払ってしまい、もう乗れないかと思った上の娘がまた泣き出す始末。まだ残っておられた巖先生がベソをかく娘を気づ

かって「真那は巖先生と一緒に後から乗ればいいじゃない」と声をかけて下さったちょうどその時、一台三輪車がやってきて四人乗ってもいいとのこと。父母が各々娘を一人ずつ膝の上に抱きかかえ、自転車をこぐお兄さんにはいささか申し訳ないことながら、おかげで子供たちは大満足でした（巖先生は、一人で自転車に乗って、後から手を振りながら追いかけてきて下さいました）。平遥の街中は、数々の史跡やトウモロコシが干してある昔ながらの民家はもちろん、山西省でも指折りというエリート高校や古いキリスト教会などが渾然と一体化しており、興味深い場所でした。おもちゃ屋の店先に、お国柄の西遊記のキャラクターのお面がずらりと並ぶ中に混じってセーラームーン（少し前、日本の小学生以下の女のこの間で爆発的人気を得たキャラクター。娘たちもこの絵柄の下着など好んで着用）のお面があったりするのもまた印象的でした。

いろいろなことがあった旅行でしたが、もともと観光は半ばあきらめていた私たち家族にとって、忘れがたい貴重な思い出となりました。これも娘たちを何かと気づかい声をかけて下さった、巖先生をはじめ同行のみなさまのおかげと、くり返しになりますが、重ね重ね感謝する次第です。この旅の間に覚えたひまわりの種の味は、

子供たちも、中国で過ごした記憶とともに、これから度々懐かしく
思い出すことになるような気がします。



山内洋一郎

朝の清涼の気が残る頃、壺口瀑布に着いた。河原におり滝口に近づくまでは、大黄河本流が作る瀑布にしてはと拍子抜けするほどの兩岸の様子であった。平坦な兩岸に人々が散在して見物している。しかし、慎重に歩を選びつつ、瀑布の下手から近づくと、迫力は違った。黄濁の流れは轟音を立てて落下し、巨岩を砕かんばかりであり、岩も抵抗して水しぶきを挙げている。一度北上した黄河は包頭あたりで方向を変え、陝西・山西の省界を南下してここに至る。ここまで来れば水量の多いのも当然。雨季はきぞと思わせた。

「この上を自転車で渡るのだそうですよ」。そういえば、兩岸の間に鋼線が張ってある。やがて赤い布をひらめかして一台渡ってきた。

十メートル以上あろうか、息を呑む芸である。もう一台後を追ってくる。私は「壺口瀑布」と書いたしぶきに濡れた岩を前面に、瀑布を渡る自転車をに入れるべく設定して、カメラを構えた。だが残念！自転車は中間まで行かずに引き返し始めた。素晴らしい作品となるシャッターチャンスはもう訪れなかった。

我々は峠を越えて臨汾に戻り、五州大酒店に泊まった。翌三日の平遙古城は、私に忘不了の強い印象を残した。市街を高い城壁が圍繞する古代の構造が、中国でもここに典型的な姿で保存されていると聞いたので、始めて耳にしただけに期待していた。曾遊の西安とはどう違うのであろうか。

駅近く、西関大街の城壁に当たるところで、我々を二人相乗り人力車を取り囲んだ。城壁に上がる。西周に建てたという城壁は三車線以上もある唐長安の城と違い、幅4.5米しかないように見えた。その路面は整理されず、ガタガタである。だから、車夫が力を入れて走るほど、我々もガタガタと揺れ、物につかまる。周囲を見回すのがやっと、カメラどころではない。時間さえ許せば、歩いて一周してみたかったと、後の感想である。市街——大小の民家、中に事務所、作業所らしい建物を含みつつ、現代建築に改められのを見な

い。古代と言わないまでも、中近世の様子はこうかと思った。

「ヨーロッパを思い出しますね」と岡野さん。私もイングランド東岸のヨークを想出していたところで、同感した。そこでも私は徒歩で半周した。教会の尖塔が見え、人々の家々に花籠が飾られていた。城壁から見る景観の西欧と東洋の差は歴然。その中で、平遥の市街の様子に何か安らぎを感じるのはなぜだろう、私はそれを考えていた。もう一度、時間に追われずにゆっくり歩いてみたいと思った。

下りから文廟、城隍廟などを経廻った。市の中心部の市楼は、西安のとは、構造も大きさも異なり小さいが、ふと思い起こさせた。日昇昌で、ここでも交通渋滞に遭い、人力車とも別れた。引き手の褐色の顔は人も思い出す。

辛苦了！

